

# 戦争に翻弄され

## ビキニ水爆実験被災者



アメリカのビキニ水爆実験(1954年)で被災した室戸船籍の第7大丸(157トンは乗組員24人のほとんどが亡くなりました)の機関士・大黒藤兵衛さんの遺族で長女の下本節子さんが「ビキニ労災訴訟」(高知地裁)の原告団長になりました。

高校にいく土地柄。下本さんは「高校卒業後地元銀行に就職したころは高度成長期で、捕鯨やマグロ漁など遠洋漁業で栄え、活気があった」と話します。その活況期に父親の姿はありませぬでした。父親は戦争とその後、米ソ冷戦の核実験に翻弄(ほんろう)された人生だったと強く思います。

原告になり、親類に父親の人生を聞いて知るようになった。口止めも

第7大丸が被ばくした様子について、船長の山

# 健康被害国は向き合え

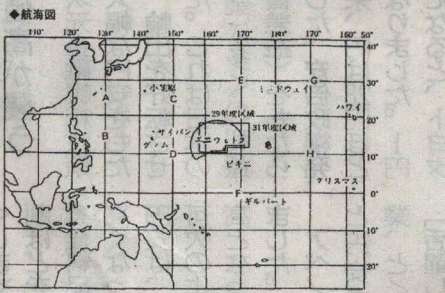
卒業して昭和17年(1942年)に兵隊として戦地の中国に行き、戦争に負けた1945年夏に帰ってこす父の母がすく

本英治さん(故人)が生前聞き取り活動をする中、証言してました。1954年、ビキニ

近くで操業しており3月1日の水爆実験直前、闇の中に多数のアメリカ軍軍艦の黒い影が見えた。

「国は、放射能の健康被害を小さく、たいしたことはない」とみせようとす

登録番号	室戸18
船名	第7大丸
船主	毛利哲也
住所	室戸2825
登録番号	KO1-6
許可番号	284
総トン数	157.27トン
機関	D330
運船所	三井造船
許可機関	28.3.16-33.3.15



S29 4/1 東京入港 N9.30-10 E178-179で操業 船体部分190-200カウンス マグネシウム海洋放棄 全員白血球減少 上陸禁止 ※3/11に空と海が一面赤く染まる。キノコ雲目撃(一部船員)機関故障でウエーキ島入港。

手づくりの「第7大丸」の航跡など

た白い灰を雪と勘違いして、手でかき集めたり、体にすりつけたりしていた。白い灰を口の中に入れたMさんは、5年ほど前に血を吐いて死んだ。

る。広島、長崎への投下に続いて、ビキニ水爆実験で被災し、苦しんでいる人たちが言うことに、を傾けないことには、

機関故障でウエーキ島に緊急入港し、アメリカ軍に体をいろいろと調べられた。船長の自分だけハワイに連れて行かれ、水爆実験をみたことを誰にも言うなど口止めされた。

「ビキニ水爆実験康被害を受けたとい質的争点をずらさなほしい。国は向き合いたい。主権者の

### 国が難癖

ビキニ労災訴訟の第1回口頭弁論で第7大丸のことを訴えた下本さん。 「国は、放射能の健康被害を小さく、たいしたことはない」とみせようとす

「国は、放射能の健康被害を小さく、たいしたことはない」とみせようとす